

# 博物館 アラカルト 10

## ●菅茶山はマルチ学者？

菅茶山（1748～1828）といえば、江戸時代後期の神辺（福山市神辺町）の儒学者で、漢詩人として全国にその名を知られ、その塾には全国から塾生が集まった……などといえば、それだけで難しい漢文が脳裏を埋め尽くし、もうたくさんという人も多いのでは。確かにこの時代の学問といえば儒学が第一で、そのためには漢文の素養が必要でした。現代の我々が「これからの時代は英語が不可欠ですよ」と言われるようなものです。しかし、高名な儒学者であった菅茶山先生とて、漢文ばかり読んでいたわけではありません。その学問的な興味は多方面に及んでいたのです。

この時代、儒学を志す者は大抵漢方医学も学びました。漢方医学では、薬の材料となる薬草の知識が欠かせません。そのために本草学も学ぶのですが、動物や鉱物までも薬材になることがありますから、植物学と限定するよりは、博物学といっても良い学問です。菅茶山も若き日は医者を目指して京都で学びましたが、本格的に開業した記録はありません。しかし、博物学的な関心は広がっていったようです。当館が所蔵する菅茶山関係資料である「黄葉夕陽文庫」には、茶山に贈られた動植物の記録図が多く残っています。鞆の浦（福山市）に現れたアシカ、備前国（岡山県）で捕まえたウミガメ、河内国（大阪府）で生えた強烈な臭いがする異草（亜熱帯で繁殖するコンニャク類のようです）……。茶山がこのような情報を求めているからこそ、各地の知人が贈ってくれたのでしょう。寛政6年（1794）に近江国（滋賀県）の伊吹山に旅行した際には、その地の蓬よもぎを持ち帰っています。いつ・どこで採集したかを記録するところは、現代の植物学者顔負けです。



河内州異草図

菅茶山は『室町志』と題する室町時代の歴史書を書いているように日本史にも興味を持っていましたが、それは考古学的内容にまで及んでおり、各地で収集した瓦のコレクションを入れた箱があります。その中には、山田寺（奈良県桜井市）の飛鳥時代の瓦もあります。茶山が大和旅行時に入手したのでしょう。地元の考古遺物にも関心があり、神村（福山市神村町）で出土した弥生時代の銅鐸の拓本や図面も残っています。広島県内で発見された銅鐸は、この拓本を含めて3例しかありません。



銅鐸拓本

この他にも、茶山の蔵書には刀剣・茶道・和歌など様々な分野のものがあります。このように培われた知識は、「筆のすさび」などの随筆に生かされており、現代のエッセイストなど及ばぬ博識を披露しています。菅茶山は、江戸時代のマルチ学者だったのです。

（主任学芸員 西村直城）